

大和の地名の名付け親

10408 田口 紘一

はじめに

私は2021年2月の投稿「邪馬台国と狗奴国はその後どうなったか」において神功皇后の事績は女王卑弥呼の後を継いだ台与の事績を記したものであるとし、また、天孫降臨神話は狗奴国から譲渡され、新領地となった日向国の統治のために派遣された台与の家臣（ニニギ＝神武）であった。そして神武の東遷は台与の命によって行われたとした。2022年5月の投稿「継体天皇の系譜は、なぜ『記紀』に書かれなかったのか」において、継体天皇は応神天皇の五世孫ということで皇位を継いだが、「記紀」の元となる「帝紀・旧辞」の編纂時において、中国の歴史書『三国志』東夷伝倭人条（通称『魏志』倭人伝）を知ることになり、神功皇后こと台与やその子応神天皇は継体天皇の五世代前ではなく、もっとはるかに古い3世紀のことであったことが判明した。しかし、「継体天皇は応神天皇の五世孫」ということを覆せば、継体の後を継いだ継体朝の正統性が揺らぐことになるので、熟慮した結果、継体天皇の五世代前が応神天皇になるように系譜をゆがめたが、そのままでは真実を伝えられないので、応神天皇と継体天皇の間の系譜を不記載にし、応神と実の継体天皇の五世代前のイザサワケの命との名の交換など種々の逸話を潜入させ、よく見れば真実がわかるようにした、ということ述べた。そして、2023年3月の投稿「『魏志』倭人伝 複数史料と陳寿の困惑」では、帯方郡から倭までの行程記事のうち、日程記事は、266年に西晋に朝貢した使節から中国側が聞き出したものを陳寿は併記したとし、使節を送ったのは台与とした。その日程の分析から邪馬台国は北部九州ではなく、大和の纏向であると判断された。つまり、266年の段階では台与は北部九州から大和へ東遷していたのである。それは纏向遺跡が突然3倍に広がる時期（橋本輝彦・白石太一郎『邪馬台国からヤマト王権へ』）で、考古学的にも合致するのである。

今回は、その大和地方に名付けられた地名について述べる。

北部九州における神功皇后のおびただしい伝承

北部九州には現在まで残る神功皇后に関する伝承が非常に多い。

筑紫の国における神功皇后の行動は、『古事記』では訶志比(かしひ)宮、宇美、伊斗(いと)村、末羅縣玉島里しか出てこない。しかし、『日本書紀』では詳しく、豊浦宮(下関)から岡湊(遠賀川河口)に入るにあたって、岡県主の熊罥(わに)が出迎え、伊観(いと)県主の先祖五十迹手(いとて)が引嶋(彦島)まで出迎え、儼県の檀日(かしひ)宮へ居し、仲哀天皇の急死後、熊襲を臣下の鴨別(かもわけ)に討たせたが自然と服従したという。その後、御笠を通り、松峽(まつお)宮へ移り荷持田

(のとりた)村にいた羽白熊鷲という賊を討ち、その地を「安(やす)」と名づけた。さらに山門県へ行き、田油津(たぶらつ)媛を殺した。その後、松浦県の玉島里で魚釣りの占いをした。儼県に戻り、定めた神田に水を引くため那珂川上流の迹驚(とどろき)岡の大岩を砕き、溝をつくった(裂田溝(さくたのうなで)、というように筑紫国を一回りしてから新羅へ遠征している。

実際、北部九州には「記紀」のほか『風土記』や『万葉集』などの古代文献のほか、社伝、地域伝承、地名などのなかにもおびただしい神功皇后伝承が残されているという。河村哲夫氏(『神功皇后の謎を解く 伝承地探訪録』原書房 2015年)によると、九州特に筑紫(筑前・筑後)や肥前におびただしい神功皇后の伝承が残っており、これらの伝承地をつないで経路にすると、筑紫の国をくまなく回り、壱岐・対馬にも行き、豊国の海岸沿いを航行し、遠く宮崎方面(都農)まで行っていることになる。

このような伝説により私の台与に関する推論を述べると、『魏志』倭人伝において、卑弥呼の帯方郡への救援要請によって倭に派遣された張政は郡での地位は低いが軍事知略に富んだ人物であり、来倭後、直ちに女王卑弥呼を罷免した。神託で行うような手段では敵、狗奴国に勝てるはずはないからである。張政は卑弥呼女王国である筑紫国の軍事力では勝利できないと考え、隣国の豊国(現在の豊前・豊後)と連合を目論んだ。そこで筑紫・豊合併後の王に豊国王を迎えるという条件で豊国との合併交渉が成り立ったが、筑紫国の一部のクニ王が主権が失われるとして、反発し、千人が死んだ。それで豊国王を合併後の王にすることを諦め、同じ豊国の台与(とよ)媛を合併後の祭祀王とし、実政治は筑紫国と豊国のクニ王たちの合議制で行うことで収まった。そのような経緯で筑紫・豊国連合の女王となった台与は狗奴国との戦線となっている筑後川沿岸へ移動し、そこで、張政(「記紀」では住吉神として登場)の指導のもと、「記紀」神功皇后に記されているような活躍をしたと推論している。

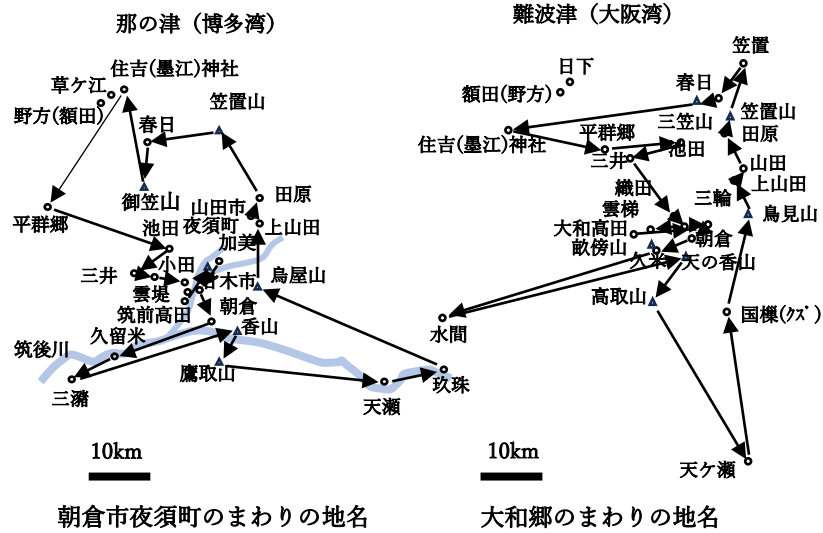
九州筑紫朝倉地方との地名の類似

福岡県甘木・朝倉地方には平塚川添遺跡を初め大規模な環濠集落が数多く存在するとみられる所で、並行して流れる小河川による広大な扇状地がみられ、古代の水田開発に非常に適した地形となっている。

そして、朝倉市夜須町の周りの地名とその位置、および奈良盆地の東南部纏向の周りの地名とその位置は、三輪、朝倉、長谷など、実に多くの地名が一致するのである。

安本美典氏は図1のように両筑平野(筑紫平野のうち久留米以北の部分)と奈良盆地とそれぞれの周辺で酷似する地名を27カ所、奥野正男氏(奥野正男著作集Ⅲ『邪馬台国の東遷』梓書院 2012年)は九州と近畿で酷似する地名として90カ所まで数えておられる。

そして、このことは北部九州とくに朝倉地方の勢力が奈良へ東遷して奈良の似た場所に名付けしたであろうと推測しておられる。



朝倉市夜須町のまわりの地名

大和郷のまわりの地名

安本美典『邪馬台国は東遷したか』三一書房 1994 年に一部加筆

図 1 福岡県朝倉市と奈良県大和郷のまわりの地名の酷似



A 小鷹城山より西方を眺める



B 三輪山より西方を眺める

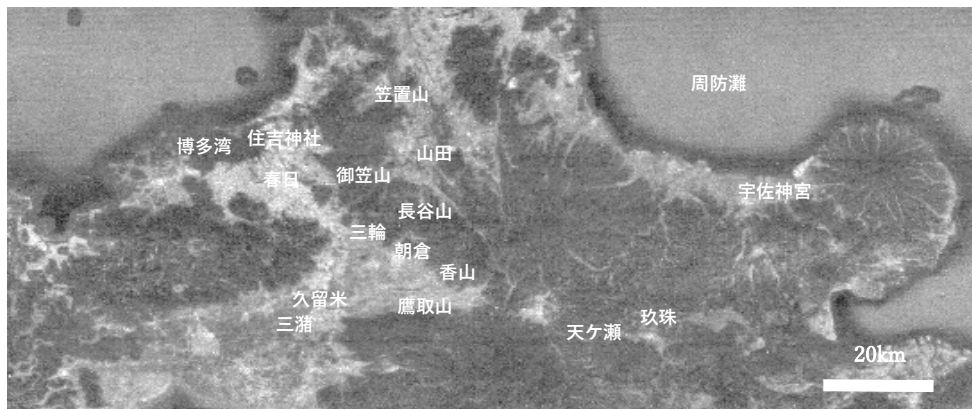
写真はグーグルマップ 3D

図 2 両筑平野と大和盆地

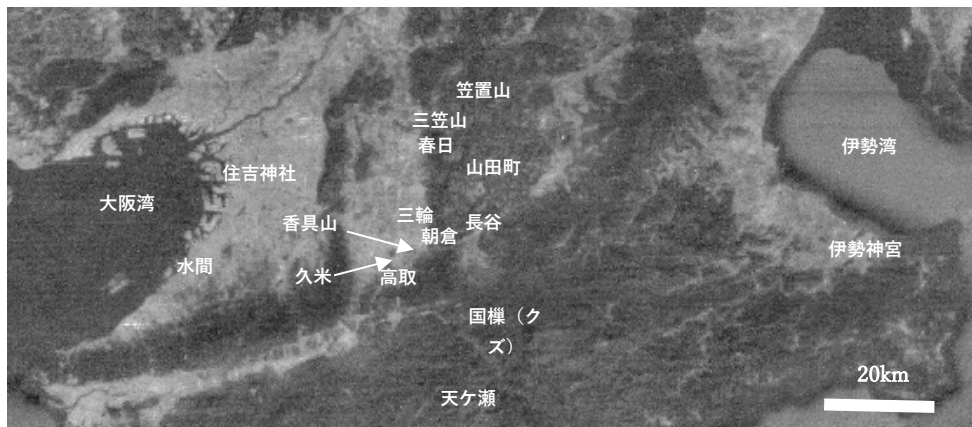
朝倉市は盆地とは言えないが、そこに立つと、山に囲まれており、確かに奈良盆地内に立ったときの雰囲気がよく似ているのである。西南西方向に筑後川下流域があるので、開けているように思われているが、その向こうに長崎県の雲仙・多良山系が見えるので、そこも山にさえぎられているように見えるのである（図2）。

図3は北部九州と奈良県周辺の酷似する地名、あるいは関係する地名をグーグル衛星写真上に記入したものである。

北部九州の地名を近畿に移したのではないか、という想定は、地形的にも命名の不自然さはないように思える。



両筑平野とその周辺の地名



奈良平野とその周辺の地名

図3 両筑平野と奈良平野の地名の酷似

そもそも、どうして両筑平野の地名が奈良盆地東南部に写されたのであろうか。誰が地名を移したのであろうか。「記紀」の中から、朝倉地方と奈良の両方に関係のある人物として、よく挙げられているのは斉明天皇である。斉明天皇はその7年(661)、百済救援のため出兵を命じ、

自らも筑紫へ出向いた。5月9日に朝倉広庭宮の遷幸、7月24日朝倉宮で崩御している。従って、斉明天皇説では、奈良の地名を朝倉に移したという考えである。しかし、斉明天皇の朝倉居住はわずか2か月半に過ぎない。またそこで永住することを考えていたわけでもない。わざわざ地名を変える理由にきわめて乏しいのである。しかも、広範囲に地名を変えることなど不可能と考えられる。

ここは、やはり、安本美典氏らの主張されているように朝倉から奈良へ遷った勢力が朝倉の地名を奈良に遷したということの方が可能性が高い。その時期は新しい勢力によって画期的に発展したときが最も可能性が高い。すでに発展していて、地名が確定しているのを改名するのはよほどのことでなければならぬだろうし、改名する範囲はおのずと限られるであろう。未開の新天地に遷った勢力が広範囲に勢力を伸ばして、征服した地に新しい地名を付けたという経緯が最も可能性が高いと考えられる。ちょうど新大陸アメリカで、ヨーロッパ人が移住して次々に故郷の地名を名づけていったように。

時期的には3世紀の奈良盆地東南部、奈良県桜井市の纏向遺跡が浮かぶ。纏向遺跡はこの時期に突如出現し、4世紀半ばには消滅するという遺跡で、農業生産を行った形跡がなく、外部からの流入が強く認められる遺跡である。卑弥呼邪馬台国近畿説の主に主張されている遺跡である。この遺跡に移住してきた人がこの地域に新しい名前を故郷の地にちなんだ名を付けたであろうことは十分に考えられることである。安本美典氏らもそのように、考えられておられるようだ。

このような時期と人物を「記紀」の中から探すことになるが、ほとんどの人はここで行き詰まっている。それは天皇の系譜について、神武天皇の實在・非實在論は分かれるが、第2から第9代の天皇は非實在で、第10代の崇神天皇からは實在でその系譜は正しいと考えておられるからだ。特に神功皇后については、『日本書紀』にその干支による紀年を西暦に換算すれば201～269年に設定されているのもかわらず、その朝鮮半島との事績がほぼ干支2順（120年）後のことであるので、ほとんどの人は神功皇后を320～390年ころの人物として取り扱っておられる。その上で、實在・非實在を論じておられる。

私は、はじめに述べたように、継体天皇は応神天皇の五世代孫という振れ込みで天皇位を継いだ。が、「記紀」の元になる「帝紀・旧辞」編纂（私は厩戸皇子・蘇我馬子の編纂したという「天皇記・国記」と考えている）の時に、入手した『魏志』倭人伝から応神天皇の年代は、継体天皇の五世代前ではなくてもっと古い三世紀半ばであることが分かった。しかし、継体天皇の子孫である天皇家は、「継体天皇は応神天皇の五世代孫」という由来を動かすことができず、応神天皇が継体天皇の五世代前という誤りの系譜を創作した。神功皇后は応神天皇の母であるから必然的に彼女も四世紀半ば以後の人物として表現した。その代わり、応神天皇から継体天皇までの系譜を不記載にし、真実を示すために「氣比の神との名の交換」など奇異な事柄を歴史書に紛れ込ませた、という解釈をしている。そのことによって、「記紀」・『魏志』倭人伝・考古学的

知見・地震等自然災害など、すべての事柄が矛盾なく説明できることになるのだ。

ということなので、私は神功皇后を『魏志』倭人伝に登場する「卑弥呼」や「台与」にあてることができる。『日本書紀』に示す神功皇后の在位紀年 201～209 年は卑弥呼と台与の在位期間、事績は卑弥呼を継いだ台与を表している、と考えている。

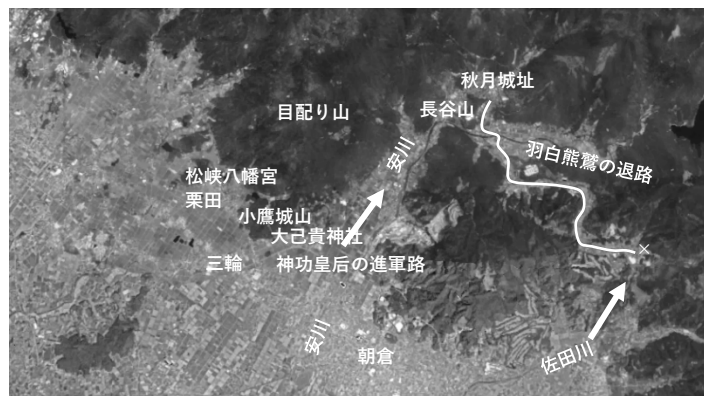
そのような背景のなかで、神功皇后こと台与の活躍を考えてみる。

神功皇后紀 9 年条に「皇后は熊襲を討とうとして、香椎宮から松峡宮に移られた。・・・羽白熊鷲を殺した。『熊鷲を討って心安らかになった』といわれた。それで、そこを『安』という」とある。ここでいう「安」は現在の福岡県朝倉郡筑前町である。旧地名は夜須町であった。安本美典氏は「天の安河原」の「安」であるという。また、そこに夜須川（現在の小石原川）が流れている。この夜須川の上流に羽白熊鷲の砦があったという伝説が残っている。伝説による討伐の過程は綾杉るな氏の著書『神功皇后伝承地を歩く 上』（不知火書房 2014 年）に詳しい。私の考えも入れて概要を述べると、次の通りである。

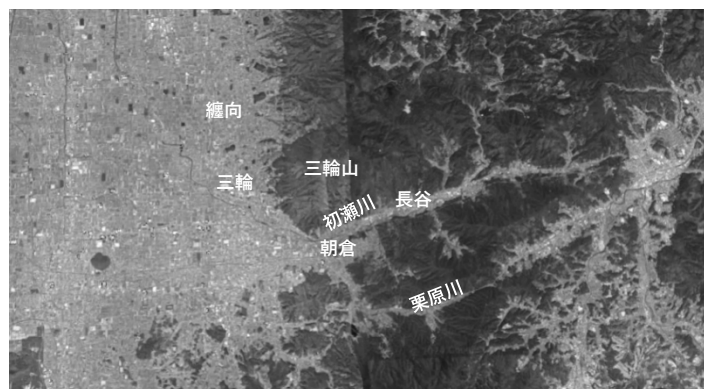
神功皇后は豊国王を筑紫・豊国連合国の王にすることに反対しているヤス国の王・羽白熊鷲を討伐するためヤス国の松峡というところに宮を移した。羽白熊鷲はヤス川の上流に居を構えていた（現在の秋月城址あたり）、神功皇后はヤス川とその南を流れる佐田川を攻め上って羽白熊鷲を挟み撃ちにする作戦に出た。羽白熊鷲はヤス川を攻め上った本隊に押されて敗走し佐田川上流（現在の寺内ダム付近。図 4 A 中×印）で佐田川を攻め上った分隊に挟み撃ちにされ命を落とした。

図 4 A はその場所と経路をグーグルマップ上に記入したものである。神功皇后、すなわち台与にとっては大きな戦いをしたところであるから、後々まで脳裏に残った土地であったろう。

また、台与は領主羽白熊鷲を討ったのであるから、当然、その地、おそらく福岡県朝倉郡筑前



A 福岡県朝倉郡筑前町（旧夜須町）三輪付近



B 奈良県桜井市三輪付近

図 4 九州と奈良の三輪付近の地形

町・朝倉市一帯は台与の領地となったであろうから、かなりの間そこに留まったとみられる。台与にとっては初めての領地であったろう。そこで筑紫・豊国連合国家の女王（祭祀王）として君臨したのだと考えられる。なお、図中、目配り山（標高 422m）は神功皇后がその頂上に立って国見をしたという伝承があるが、より簡単に登れる見晴らしの良い山として小鷹城山（標高 213m）がある。大巳貴神社の御神体とされる山（標高 172m）から 500mほど西の峰続きの山で、三輪という地名の所にあるので当時はおそらく「三輪山」と呼ばれていたと考えられる。松峡宮（筑前町栗田）のあたりから眺めると特に目立つ山（図 5）で、登って国見をしたくなるような山である。30 分ほどで登ることができ、この高さでも図 2-A に示すように十分に両筑平野を見渡すことができる。本来この山が神功皇后が国見をした山である可能性が高い。目配り山は確かに標高が高く、見晴らしも良いが、図 6 に示すように松峡の地からは遠く小さく見え、近くの小鷹城山の方が目立つのである。小鷹城については、『筑前国続風土記』巻 25 に、「むかし檜原備後守高利と云し者、此城を築て在城せり。其後秋月種實が出城と成、家臣内田善兵衛を城番とせらる」とある。

小鷹城山（三輪山）



A 福岡県朝倉郡筑前町栗田から東南 小鷹城山を見る



B 奈良県桜井市纏向から東南 三輪山を見る

写真はグーグルマップ ストリートビュー

図 5 福岡朝倉と奈良纏向の風景

そして台与は、大和に東遷して纏向の地に立ってみたとき、その地が松峡宮から見た景色・地形にあまりにも似ていることに気付いたに違いない（図 4 B および図 5）。特に図 5 に示すよ

うに台与が今まで居た松峡宮から見ていた小鷹城山（三輪山）の形・方向およびその周辺の景色と新しく遷ってきた奈良の纏向の地から三輪山（標高 467m）の形・方向およびその周辺を見た景色は瓜二つなのである。しかも、新天地纏向からの景色は一段とスケールが大きく山（三輪山）は高く秀麗だ。台与はそれを見て驚嘆し感動したであろうことは想像に難くない。神が新天地に九州の旧地とそっくりな地を与えてくださったと考え、「親魏倭王」の地位が神から授けられたと確信をもって自覚したかもしれない。

そこで、新しい地に、三輪や長谷、朝倉といった名を付けていったと考えられる。

これが発端になり、勢力を伸ばすにつれ、次々に周辺の地に名を付けていった結果が図3、あるいは、安本美典氏、奥野正男氏が指摘されるように多くの酷似した命名が行われたと考えられる。

国名「ヤマト」は、卑弥呼の出自の山門のクニ（福岡県みやま市）がいわゆる筑紫国の当時の国名であった。つまり、筑紫国は連合国家であり、奴国王が連合国家の代表であったときは、「奴国」、伊都国王が代表のときは、「伊都国」、そして卑弥呼のときは「ヤマト国」と呼び名が変遷したと考えている。卑弥呼は神功皇后紀では「田油津媛」として登場している。

また、宇佐神宮と伊勢神宮の位置関係もまた両宮はそれぞれの都（奈良纏向と筑紫筑前町）から東方へ約 80km の地にあり、両宮の北は数 km で海に面しているなど、という類似の関係が見いだされ、伊勢神宮の地が奈良から遠いところにあるのもこのような関係から選ばれたと推測することも可能なのである（図3）。宇佐神宮と伊勢神宮の境内の様子がそっくりなこと、特に宇佐神宮の白橋（門前町の様子から元はここが神橋だったと考えられる）から亀山上の御殿までの方向及び距離と伊勢神宮の宇治橋から内宮までの方向及び距離が完全に一致することは、既報「邪馬台国と狗奴国はその後どうなったか」（2021年2月）において述べたとおりである。



写真はグーグルマップ ストリートビュー

図6 松峡の地（筑前町栗田）から見た目配り山と小鷹城山